第 35 回レーザセンシングシンポジウム開催趣意書

第 35 回レーザセンシングシンポジウム
実行委員長　情報通信研究機構　石井昌憲

レーザセンシングシンポジウムは、1972 年に開催された第 1 回レーザレーダシンポジウムから始まり、第 12 回からは現在の名称に変更され、今日に至っています。本シンポジウムは国内最大のレーザレーダ（ライダー）に関する学術会議であり、ライダーを代表とする様々なレーザセンシングに関わる全国の研究者や技術者の発表と情報交換の場として機能しています。

レーザレーダ研究会は、第 1 回レーザレーダシンポジウム開始の際に、日本のライダー研究の先駆者である稲場文男東北大学教授を会長として組織され、シンポジウムの開催、レーザセンシング技術の向上と普及に関する活動をすすめてきました。また、レーザレーダ研究会は、日本で開催された過去三回（第 6、17、23 回）の国際レーザレーダ会議（ILRC）現地実行委員会を構成するなど、国際的な活動にも大いに貢献してきました。
レーザレーダ研究会主催のレーザセンシングシンポジウムは今年で 35 回目となります。シンポジウムでは、ライダー、レーザ、レーザ分光、レーザ計測など、幅広いレーザセンシング技術の開発と応用に関する学術成果や、今後の研究についての提案・展望などが幅広く発表されます。ちなみに、前回は 2016 年 9 月 8-9 日に長野県野沢温泉スパリーナで開催され、123 名が参加し、87 件の発表がありました。今年、1976 年の開催以来約 40 年ぶりに情報通信研究機構で開催されます。今回の開催にあたり、多数のご参加を期待しております。

第 1 回目のレーザレーダシンポジウムが開催された 1970 年代初頭はレーザが現れてから年月も浅く、レーザ技術はまだまだ未熟、また周辺の電子・光学技術も現在に比べればそれこそ隔絶の感があり、「レーザレーダ」を装置として実現すること自体が大仕事という時代でした。それから 45 年以上経過した今では、レーザレーダを搭載した衛星が宇宙を飛び、身近では気付かないようなところにもレーザセンシング技術が、ごく普通に使われています。今後レーザレーダを初めとしたレーザセンシング技術はますます広く利用されていくことでしょう。

本シンポジウムは、レーザセンシングの装置開発、計測・計装技術、データ解析、運用技術など、様々な技術分野の専門家に加え、大気・海洋・気象・環境科学関係の研究者を含め、発表および情報交換を行う場として、重要な役割を担っています。今回のシンポジウムでも、レーザを中心とした光センシングに関する幅広い分野の話題を取り上げております。関係各位のご参加を心よりお待ち申し上げます。

なお今回の情報通信研究機構での開催にあたり、企業の皆様方には、参加費を割安に設定しました。新規事業開拓の参考、研修の場、あるいは広告・展示の場として本シンポジウムを利用して頂けますよう、お願い申し上げます。